



## フクシマの視点

[日経ビジネス オンライントップ](#)>[IT・技術](#)>[フクシマの視点](#)

# ここで今、原発映画を上映する理由

## 自主規制された作品、話題作が福島に集結中

2011年8月3日 水曜日 藍原 寛子

東日本大震災で起きた原発事故以来、福島県民は放射能、放射性物質の問題を何とか克服しよう、克服したいと奮闘している。放射能は目に見えないが、線量計で土壌を計ってみれば確かに、しかし残念ながら、数字は放射能の広範な汚染を示し、放射性物質の存在を教えている。今もこれからも、「目に見えない敵」と、ずっと戦っていかねばならない。

先が見えない状況の中、「映画を通じて、福島から未来を考え、何らかのメッセージを送りたい」と、原発や放射能汚染を描いた映画を集中的に上映する“福島発・未来行き”の2つの映画イベントが福島市内の独立系映画館「[フォーラム福島](#)」(阿部泰宏総支配人)で開催・企画されている。

1つは同館主催で写真家・映画監督本橋成一さんのドキュメンタリー2部作、役所広司主演『東京原発』などを順次上映する企画「特集・映画から原発を考える」。

もう1つは8月10日から5日にわたり、原発に関するドキュメンタリー映画8本とゲストトークのイベント「[Image. Fukushima\(イメージ福島\)](#)」。

福島県郡山市出身の映画評論家、三浦哲哉さんを実行委員長に、社会学者で『[「フクシマ」論 原子力ムラはなぜ生まれたのか](#)』著者の開沼博さん、総支配人の阿部さんら、福島市民と福島出身の在京者らボランティア約20人による実行委員会が企画した。

映画が描いた原発や放射能汚染の世界は？

映画界でも起きていた「自主規制」とは？

今、福島で原発関係の映画を集中的に上映する意義は？

映画が描いた未来の視座は？

いったい、私たちはどんな未来に向かって歩いていったらいいのか？

阿部さん、三浦さん、開沼さんに話を聞いた。

## 映画でも起きた「自主規制」

「特集・映画から原発を考える」は、『100,000年後(10万年後)の安全』『黒い雨』(すでに終了)、映画監督本橋成一さんのチェルノブイリドキュメンタリー2部作『ナージャの森』(同)、『アレクセイと泉』(8月5日まで)。続いて8、9月にかけて、原発の事故隠しや自治体の対応、エネルギー問題などを描き、公開も危ぶまれた役所広司主演の問題作『東京原発』、原発事故が1人の女子高校生に与えた深く重い影響を描くドイツ映画『みえない雲』など、原発事故後に注目される話題作を上映。



2つの原発映画上映イベントが企画されているフォーラム福島(福島市)

以後も『祝(ほうり)の島』(瀬瀬あや監督)、今年のアカデミー賞短編ドキュメンタリー賞受賞作で、原発事故の影響で障害を持って生まれた子どもたちの衝撃の事実をとらえた『チェルノブイリ・ハート』、福島県出身の映画監督千葉茂樹氏の構成・演出による福島第一原発のドキュメンタリー映画『あしたが消える—どうして原発?』なども検討している。

「Image. Fukushima」は、鎌仲ひとみ監督の『ミツバチの羽音と地球の回転』『ヒバクシャ—世界の終わりに』や、震災後、最も早く製作・公開されたドキュメンタリー『無常素描』など。芥川賞作家で僧侶の玄侑宗久さん、鎌仲さん、前福島県知事佐藤栄佐久さんらがゲストトークで登場する。

この中で、『東京原発』(2002年)、『みえない雲』(2006年)は、封切り当時、全国的にはほとんど上映されずに「封印」されたような作品。フォーラム福島は、独立系映画館として上映したが、全く観客が入らず、興業的には失敗だった。ところが3・11後、これらの作品は上映会やDVDに関する問い合わせもあり、関心を集めている。

なぜ、原発をテーマにした映画が作られていながら、全国では、ほとんど上映されなかったのか。上映しても失敗だった理由は？

「電力業界から広告料がなくなるのを恐れて、映画産業界、配給会社などが自主規制してしまいました。興業成績と映画の出来は別で、『東京原発』は、クオリティも高く、面白く、演劇でも上演すべきほどの作品。ところが『映画を作っても宣伝してもらえなければ誰も見ない』と、上映するのを止めてしまったのです」(阿部さん)。

電力業界の“カネの問題”は、産業界をはじめ、メディアや学術の分野の自主規制を生んだ問題が指摘されているが、原発をテーマにした作品の上映など、表現の自由を保障され、自由な表現の世界が広がっているべきはずの映画やパフォーマンス・アートの世界でも、同様の“カネの問題”から自主規制が起きていた。それが、いかに良い作品であっても、広く上映されることがなかった理由だった。

## 反原発に手を染めた人は業界から干された



「映画の世界でも原発問題には自主規制があった」という阿部泰宏さん

阿部さんは言う。

「60年代安保が終わって、体制に対して疑義、アンチテーゼを提起する『反体制作家』はたくさんいましたが、浅間山荘以降、まがまがしいものになってしまいました。手あかにまみれたメッセージにもなっていたので、作家として反体制にこだわりたい、原発をテーマにした作品を作りたいという人は次第に減ってきました」

「ただ『旧態依然の日本人のご都合主義や、偽善的な日本人観を象徴している諸悪の根源は、やっぱり原発だ』という意識は一部の作家にはあって、ルポルタージュのライターや、フリーやインディーズの分野で活動する様々な表現者が、原発にアプローチしていました。ところがその後の経過をみると、反原発に手を染めた人は業界から干されてしまいました」

今回の企画・上映は、興業的には見通しは全く分からないという。ただ、原発や放射能の被害に遭った福島県民が3・11後に自問自答している「自主規制が、原発や放射能の問題を見えなくさせてきたのではないか」という問題提起へのリアクションと、未来に向けたメッセージになれば、との考えだ。

## 飯舘村民も「見てみたい」

映画のラインナップをみると、今の福島の実状や、未来の福島を想起させるような内容やテーマで、観衆にとっては軽くない内容もある。それでもあえて今、福島で上映する意味は何だろうか。

「震災そして原発事故直後から、関連する映画のタイトルが次々に浮かんできました。実際に上映すると、福島を観客は、映画の内容を他人事のように見られないだろうと想像されました。『国や県の方針があるのに、パニックや恐怖心をあおりたてるのでは』『こういう内容でビジネスをしていいのか』などの批判も考えられ、私自身の信念や上映する正当性がないと上映できない、そういう問いに応えられないだろうと思いました。素晴らしい作品でも、安易に上映はできないとも思いました。何を取捨選択していくべきか、慎重になりました」と言う。

それでも上映に踏み切らせたのは、友人の友人で、高い放射線量で全村避難を余儀なくされた飯舘村で農業を営んでいた小林麻里さんから「ぜひ上映してほしい。映画を見てみたい」と言われたことが大きなきっかけだったという。飯舘村には映画館がなく、村民は映画を観るために、車で約40分かけて福島市に来ている。

阿部さんは映画を上映してもいいのか、それを確かめるために、実際に飯舘村の小林さん方を訪ねた。小林さんの自宅は、夏にはホテルの光で本が読めるほどの豊かな自然の中にあった。静かな生活を一瞬にして奪われた小林さんの無念さを感じ、映画上映を決めた。

都内在住の郡山市出身の映画評論家、いわき明星大学の非常勤講師として毎週福島に来ている三浦哲哉さんから、「福島でノンフィクション映画を上映できないか」という企画が持ち込まれたのは、この出来事と前後してのことだった。

---

## 「見えない放射能が引き裂く心」

三浦さんは「3・11が起きて、人生観が変わるほどの衝撃を受けた」という。

「夜の照明が暗くなった東京で、『電気は福島から来ていた』ということに改めて実感しました。メディアなどの安全神話に乗ってきたこと、当たり前と思ってきたことが必ずしも信じられるものではなかったことなどに気付いて、自分の屋台骨が崩れるような感覚を受けました」という。

福島出身の在京者、映画製作に携わる人、友人らの間で、原発事故で苦しむ福島に強い関心があったことや、「微力でも何か役に立ちたい。何かあればいつでも駆けつけたい」という声が挙がり、「Image. Fukushima」の企画に至ったという。チラシを作成する人、ウェブページを立ち上げる人。チラシは都内の映画館にも置いてもらうなど、それぞれができることを担当している。

「放射能の影響があるという住民と、ないという住民が対立し、関係が引き裂かれて対立する様子を描いた『ヒバクシャ―世界の終りに』は、今、福島で起きていることとオーバーラップしてくると思います。映画は簡単に答えを提示するものではなく、考えるきっかけを提示してくれるもの。見る人それぞれのとらえ方で、福島について考えたり、語り合う手がかりにしてもらえれば。そして企画タイトルのように、想像するきっかけになれば」(三浦さん)。

以後もシリーズ化して開催する予定で、補償問題や、健康問題、放射能汚染、避難や疎開など、福島県民が今後大きな問題として直面する可能性のある状況に対応して、「訴訟」「健康とケア」「環境」「故郷」などをテーマとした映画のラインナップを企画している。

## 「これを通り過ぎないと前に進めない」

「地元の人の方だけではなく、東京に出てきている福島県出身者も福島に帰って何かやっているという事実が重要。原発を巡る一番の問題は、当事者性が欠けていて、外野がヒステリックに『モノを申し立てている』といった状況であること。当事者が言葉を発して、言葉を作っていくことが重要ではないでしょうか」

「Image. Fukushima」実行委員の1人で、福島原発を巡る状況を研究し、被災地に入って取材もしている開沼さんは、当事者性を持って原発問題をとらえることの重要性を指摘する。

「『今のこの事態が突きつけている問題はいったい何なのか』ということを一一人ひとりが考えてほしいと思いました。何よりも、自分が考えたいと思ったから企画したようなもので、私自身もお客さんと一緒に、ともに悩み、立ち尽くしている福島県民の一人。こういう映画を上映するのも自分の中の純粋な動機で、『これを通り過ぎないと、先に進めない』という思いもあるのです」と阿部さん。

そして「原発事故が何で福島なのか、なぜ福島で起きたのか、といつも考えるんですよね。なぜ福井や新潟などほかの原発がある地域ではなく、福島だったのか、と。職業や住んでいる場所など、人それぞれによって答えは違うでしょうけれども、今後も自問自答していかなければと思っています」。

生活環境が放射能に汚染された中で暮らさざるを得ない福島の人間。福島出身者、福島のことを考える人、地元で根差して生活する福島県民。

電力業界の反応を恐れて自主規制されてきた優れた映画の数々が「復権」し、福島の人の手によって集中的に上映されるのも、3・11後の世界が、福島を大きく変えたことの象徴のように思えてならない。

そして何より、距離や環境は違っても、強いメッセージを発信して自由に表現し、自らに問いかけていこうとする映画上映に関わる人々の姿が、未来に向けたヒントにつながっているのではないかと考えてきた。

[このコラムについて](#)

## フクシマの視点

東日本大震災は、多数の人命を奪い、社会資本、自然環境を破壊したが、同時に市民社会、環境、教育、経済、政治や行政など、各分野に巨大なパラダイム・シフトを起こしている。我が国はどのような社会を志向しているのか。また志向していくべきなのか。「原発震災」で、社会の姿が大きく変わりつつある福島、震災のフロントラインで生きる人々の姿から、私たちの社会のありようをグローバル(グローバル+ローカル)な視点で考える。

[⇒ 記事一覧](#)

[著者プロフィール](#)

藍原 寛子(あいはら・ひろこ)



フリーランスの医療ジャーナリスト。福島県福島市生まれ。福島民友新聞社で取材記者兼デスクをした後、国会議員公設秘書を経て、現在、取材活動をしている。米国マイアミ大学メディカルスクール客員研究員として米国の移植医療を学んだ後、フィリピン大学哲学科客員研究員、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員として、フィリピンの臓器売買のブローカーシステムを調査した。現在は福島を拠点に、東日本大震災を取材、報道している。フルブライター、東京大学医療政策人材養成講座4期生、日本医学ジャーナリスト協会会員。

## **日経BP社**

[日経ビジネス オンライン](#) [会員登録・メール配信](#) — [このサイトについて](#) — [お問い合わせ](#)  
[日経BP社](#) [会社案内](#) — [個人情報保護方針/ネットにおける情報収集/個人情報の共同利用](#)  
— [著作権について](#) — [広告ガイド](#)

© 2006-2011 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.